

パフォーミング・アーツ・ウェーブ

3. パフォーミングアーツガーデン 2012

日 時：2012年1月7日（土） 14:00～18:30

場 所：愛知県芸術劇場小ホール

出演者・作品：

- | | |
|--|------------------------------------|
| 1. Teckey Nickey (中京大学ダンス部) | 『哀しみを聞く樹』 |
| 2. D-connection (至学館大学創作ダンス部) | 『BEAT ITー心の声』 |
| 3. archaiclightbody×【exit】 | 『抱きしめあうと眠りづらい
Original&another』 |
| 4. 太めパフォーマンス | 『太めパフォーマンスの酒池肉林』 |
| 5. フ透明少年×渡邊春菜 | 『静かな人形』 |
| 6. ARPON | 『Chaos of paradise』 |
| 7. 演劇ユニット,5 (てんご) | 『ミカミ』 |
| 8. 吉田琢己 | 『toki【時】』 |
| 9. 三輪亜希子 | 『マトルの約束』 |
| 10. Water Drops Contemporary Dance Company | 『昼から呑む』 |
| 11. ゲスト: C/Ompany | 新作『そこそこ』 |

この催しは、「愛知で活動している若手パフォーマー」を募集して作品を上演するチャンスを与える若手アーティスト育成プログラムである。多数の舞台作品を一気に上演することにより、多くの観客に彼らを知っていただく機会を設けると共に、若いアーティストたちにとってはジャンルを超えた交流からパフォーマーそれぞれのレベルアップをはかる場を提供す



archaiclightbody × 【exit】

ることが目的で、今年で3回目の開催となる。昨年までは選定せず応募者すべてに上演の機会を与えたのに対し、今年は「初めての応募」「既存のジャンルを超えようとした意欲的な作品」「先鋭性が高く上演までにブラッシュアップの見込まれる作品」などの基準により、10作品（アーティスト）を選定して上演した。最後に、ゲスト・アーティストの上演を行った。

上演は、3部構成で、全体が4時間半に渡る長時間公演となった。第1部は大学のダンスグループやその卒業ダンサーが出演するパフォーマンスを上演。ユニゾンでの躍動する踊りはアンケートでも評判が良く、多くの観客にとって見やすかったようだ。卒業ダンサーを含む若手ダンサーたちの作品は、それぞれが振付・演出し、音楽の選択や小道具の使用も含めてチャレンジフルな作品として仕上げられていた。

第2部は、映像を使う作品を主に上演。趣向を凝らした作品が続いたため、受け取り手側に多少の負担がかかったというようなアンケート結果もいただいたが、多様な現代のパフォーマンスというものに触れていただくよいきっかけになった。

第3部は、生花を大胆に使用した衣装と生演奏ならではの緊張感あるソロダンス、演劇とダンスの融合作品、そしてゲストによる4コマ漫画の連続のように次々に展開されていくリ



フ透明少年 × 渡邊春菜



三輪亜希子

ラックスしたパフォーマンスで、それぞれ見応えがあった。

さらに、昨年同様、催しの制作側…チラシのデザイン、舞台制作、広報活動については、若手デザイナーやアートマネジメント実践講座受講生に参加してもらい、アーティストだけではなく、舞台を成り立たせる人材の育成につなげた。



ゲスト: C/Ompany

公演撮影:加藤光

*関連事業:パフォーミング・アーツ・ガーデン 2012 アフタートーク

「パフォーミング・アーツ・ガーデン 2012 を話そう! -あの公演、どうだった? -」

日時:2012年1月25日(水)19:00~20:45

場所:アートスペースE・F

入場者数:

パフォーミング・アーツ・ガーデンの観客	17人
〃	制作スタッフ 7人
	(アートマネジメント実践講座受講生)
〃	出演アーティスト 8人
文情スタッフ	2人
合	計 34人



この催しは、アートラボあいちを拠点に活動を行っているグループ「Arts Audience Tables ロプロプ」からの提案により、出演アーティスト・観客・制作スタッフが一堂に会して「パフォーミング・アーツ・ガーデン」について語る場を設ける形のアフタートークとして開催した。共催をロプロプとし、制作・運営は、アートマネジメント実践講座受講生とロプロプメンバーが行った。司会・ファシリテーターは、ロプロプのメンバーでもある亀田恵子氏(舞踊ライター)が担当した。

趣旨としては、一つには、観客自身が、ほかの観客の感想を聞いたり意見交換することで、公演作品や出演アーティストへの芸術的視野を広めること。また、「パフォーミング・アーツ・ガーデン」は出演アーティストに加えて若手制作スタッフも育成・成長の場として企画した催しだが、今回出演したアーティストおよび制作スタッフ(アートマネジメント実践講座受講生)が、観客からの生の声を聞くことで、より立体的に「作品や創作活動の先にあるもの」を実感してもらうことも目標とした。

催しは、観客の方々に公演の感想をざっくり聞くとところから始め、次に参加してくれたアーティストに対して質問を投げかけアーティストが答えるという形式をとりながら、公演当日の映像や静止画(写真のスライドショー)を用いて公演の振り返りを行った。最後に出演アーティスト・制作スタッフ一人一人が、この公演・実践講座としての制作体験に参加しようと思った理由について話をし、参加者全員でその話に耳を傾けた。

公演終了後のアフタートークでは、出演アーティスト自身が自分の作品について語る場合が多く、こうした出演アーティスト・観客・制作スタッフが一堂に会して互いにフィードバックし合いながら話すという場は珍しい。今回は、出演アーティスト・若手制作スタッフともに育成・成長の場として企画したこの催しならではの交流の場を設けることができたと言えるだろう。